No.1794

79年5月2日～4日

五月合宿

越後三山

越後三山縦走

A隊

（編成）L竹林金一郎、徳永健治、中島三夫、塚原正典、田中隆

5月2日（曇）

（行動内容）五月合宿として、春の越後三山をA隊、B隊に別れて行うことになった。初日の入山は、駒ガ岳の肩の小屋までなので全員で行動する。タクシーで駒の湯の手前まで入り、荷物を整理して出発。快適に小倉尾根を行く。二ピッチ目までは雪もなく、春の尾根歩きを楽しむ。

途中からやっと雪が現われ、春山らしくなって来た。空模様がだんだんあやしくなり、駒ガ岳の頂上付近はガスがかかっている。雪の尾根を一ピッチで小倉山に到着。ここで大休止をとり、目の前に広がる越後連山の眺望を楽しむ。小倉山からは広くなった尾根を三百メートル位だらだらと歩き、ちょっとしたコルから駒ガ岳へ一直線の急登が続く。一ピッチで駒の小屋手前の雪稜に出て、小雪の舞う中を急いで小屋まで行く。駒の小屋は半分ぐらい雪で埋まっている。我々は小屋の右手の雪面にテント一張とツェルトを張った。午後、時間があったので駒ガ岳の頂上まで往復する。

（タイム）駒の湯6・00（6・30）小倉尾根上7・00雪の尾根上8・00（8・30）小倉山11・30（12・00）駒の小屋14・00

5月3日（晴）

（行動内容）朝、起きてみると青空が広がり、今日の春山漫歩が約束された。

今日からはA隊、B隊とに別れて行動する。我々A隊は、今日中にオカメノゾキを通過しなければならないのでB隊より早く出発する。駒ガ岳頂上までは雪の急斜面をひとがんばりで着く。目の前に八海山が現われ、オカメノゾキも見える。心配していた雪の状態だが、オカメノゾキは黒く輝いていた。駒ガ岳から中の岳へは檜廊下という難所はあるが、それほど問題にならず通過する。いくつかの峰を登り下りしながら、中の岳直下の峰で休みながら春山を楽しむ。急登を一がんばりで中の岳の頂上である。小屋は屋根だけのぞかせていた。小屋から頂上の標識のある所へ行き、全員で写真をとる。ここまでは順調、天気も上々だし気分が良い。しかし、これからが本日のハイライトの所だ。中の岳から御月山までは広い斜面の急な下りを、くさった雪に気をくばりながら行く。御月山を越え、いよいよオカメノゾキへの急下降である。稜線も細く、岩も所々現われ、非常に歩きづらくなる。途中で雪もなくなり、アイゼンをはずし、オカメノゾキに到着。ここまで下ると今度は暑くてしょうがない。風を求めて、銘々、雪のある所で大休止する。このオカメノゾキまでは中の岳から八二五メートルの下りであった。そして、今度は、八海山まで五百メートルの

登りが始まる。いささか気持が憂うつになり、全員言葉もしめりがちである。意を決して、本日最後の仕事にかかる。日も大分西に傾き、いく分涼しくなるが、登りになるので暑くてたまらない。途中、岩場が出てきて、単調な登りにも変化がでてくる。小一時間登ると雪も現われ、雪稜上でアイゼンをつけ、がんばる。やっとの思いで荒山へ着き、テントも張れる所があったので、今日の行動を打ち切ることにした。今日一日は本当に長かった。

（タイム）駒の小屋6・00頂上6・30檜廊下7・30（8・00）中の岳10・00（10・30）オカメノゾキ13・00（14・00）荒山16・00

5月4日（晴）

（行動内容）本日も大変良い天気である。今日の行動は八海山を越えるだけなので、朝、少しゆっくりと出発。荒山からは急斜面の朝の一運動で五竜岳へ着く。これから八海山の岩峰群を越えることになるが、要所要所にクサリがあり、別に問題にならない。しばらく登り下りをくり返し、最後の大日岳を左から巻き気味に下ると千本檜小屋に着いた。これで、予想していた難所の通過はすべて終った。縦走もここで稜線を離れるので、皆、思い思いのポーズで記念写真をとった。対面の駒ガ岳に別れをつげ八海山を一気に下る。金剛霊泉でうまい水を飲み、後はゆっくりと新緑の中を足取りも軽く下る。

（タイム）荒山9・00五竜岳9・30（10・00）入道岳11・00千本檜小屋12・00（12・30）金剛霊泉14・00里宮15・00

（竹林金一郎記）

越後駒ガ岳・兎岳・丹後山縦走　B隊

（編成）L矢島俊一、大串忠雄、飯沼武近、成松明俊、宮本雅江、外薗信夫、下村睦子

5月3日（晴）

（行動内容）六時出発。コルまではひと登り、八海山パーティーに先行してもらい、我々も出発。中の岳までの縦走を開始する。日が昇るにつれて雪がくさりはじめ、アイゼンがダンゴになる。雪の斜面を下ったりハイマツの間に分け入ったりの縦走路がつづく。天狗平まではそれほどの難所はない。難所はないのだけれど、ピッケルなしの十人ほどの高校生らしいグループを見て少しびっくりする。

檜廊下はさすがに、音にきこえたというほどではないにしても左に切れ落ちた部分があり、降雪中、雪庇の発達状況によってはかなり危険な箇所になると思われた。

中の岳への登りにかかるとさすがに苦しく、パーティーが長くのびる。小屋の前を過ぎて大休止をとる。

兎岳へはまだ長い。雪のくさり方はますますはげしくなり、ステップを踏み抜いてころがり落ちる者も出る。

兎岳着。雪の上に天幕をはる。夕食の準備をする時になって、ペミカンのにおいがかなりきつくなっているのを発見、大議論となる。リーダーは今後の食料計画の役にも立つから少し食べてみようと言い、O氏は腹下しをかかえては行動が苦しくなると言う。結局ペミカンは残飯袋へ入ることになった。その話にああだこうだと言っているうちに八海山パーティーとの交信時間が過ぎてしまった。

（タイム）起床3・30出発6・00中の